

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 8 日現在

機関番号：13501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653241

研究課題名(和文) 知識基盤社会における「型の教育」探求のための総合的データ構築

研究課題名(英文) Collection of Comprehensive Data for Investigation of "Education based on Form (Kata)" in the Knowledge Society

研究代表者

阿部 茂 (ABE, Shigeru)

山梨大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20184210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：人知が極端に高度化した現代知識社会において、「型」の模倣によって人間の身体に蓄積される「知」はいかなる可能性を持ちうるか。これを歴史的に検討するための史資料の蒐集が本研究の目的である。注目したのは江戸時代である。それは、この時代が、近代に先駆けて知識社会への転換が進み、人為・人知による自然環境の開発と身体という内なる自然の羈束とが進行した時代だったからである。この時代は知識社会の萌芽期でありながら、しかしその知は常に自然との折り合いにさし戻され自然から大きくは遊離しなかったことが明らかになってきた。本研究では、知識社会に生きる我々がこのことから得られる示唆を読み解くための史資料を広く蒐集した。

研究成果の概要(英文)：What kind of possibility can the intellect accumulated in the human body by mimicry of form(Kata) have in the present knowledge society, in which human intellect developed extremely? We attempted to collect historical records for examining this question. We especially observed the Edo period, because it is almost from this time that a change for the knowledge society advanced prior to modernization. It was the age when human act and intellect began broadly to exploit nature and to restrain human body, namely inner nature. However the intellect of this time was always returned to compromise with nature, and has not been isolated from it.  
We collected broadly various materials for us who live in the knowledge society to learn from this historical fact.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：型 身体 内なる自然 外なる自然 人知 人為

## 1. 研究開始当初の背景

今日、ICT機器などの充溢している知識基盤社会の生活環境の中で、人間の知識や働きはあらかじめ人間の身体の外部に蓄積され、その「外部化」された知識や働きを必要に応じて検索し、利用するという主知的な生活スタイルが主流になっている。しかし、他方では子どもの人間関係形成能力や働くことへの意欲の減衰が問題とされ、そうした能力・意欲の涵養が急務として訴えられるようになってきた(たとえば、キャリア教育の推進)。ところで、明治以降の学校教育の発展・拡大の過程をふり返る時、伝統的な「型の教育」が、近代的な「知の教育」としての学校教育の後景に追いやられてきたことは明らかである。しかし、1960年代以降の経済発展による消費生活の向上や80年代以降の知識社会化、その半面での地域の生活文化の型の喪失などとともに学校教育の混迷が招来された現時点に立ちみると、「型の教育」は、少なくとも高度経済成長期までは、「知の教育」と補完しあって安定的な人間形成を可能にしてきたと痛感させられる。このことは、例えば源了圓が『文化と人間形成』(第一法規出版、1982)で指摘したことであるが、ちょうどその当時から急速に進行しはじめた消費社会化・知識社会化のなかで、そうした視点からの研究が継続して積み重ねられてきたとは言いがたく、あらためて検討材料の蓄積が求められていると考え、この研究に着手した。

## 2. 研究の目的

(1)知識基盤社会・消費社会といわれる今日の社会のなかで、学校教育はより「知の教育」への傾斜を深め、他方では、直接的な体験の重要性が叫ばれるようになってきている。このような状況にあって、かつての日本において主要な教育の方法をなしてきた「型の教育」(一定の身体的動作の模倣とそのくりかえしによる芸能的ないし職業的な技の体得と精神

的鍛錬)の方法が果たしうる教育的意義を、あらためて検討しなおす必要性を痛感した。本研究は、そうした検討に資する思想史的な文字資料、語り伝えなどの口承資料、および絵画・写真などの視覚的資料を総合的データとして蒐集・整理することを目的とする。

(2)そこで、本研究では、明治以降の学校教育が表面的には「知の教育」として、子どもの教育だけでなく社会教化的機能をも担って「因循固陋」なムラ社会の慣行=旧慣を排除しようとしたにもかかわらず、人格形成の基本的な側面では、伝統的な祭事や儀礼の実践、年齢階梯組織における遊びや神事の伝承、宗教的な行、伝統芸能の稽古、さらに徒弟制度的な職業的技術の伝授といった教育装置=「型の教育」を備えた民俗慣行によって補われ、それによって日本人としての安定的な人間形成が可能ならしめられていたとの視点に立って、その実態を再検討するための総合的な資料(思想史的な文字資料、口承資料、および絵画などの視覚的資料)を蒐集する。

(3)こうした資料の蒐集・蓄積・整理によって、人間の原初的な能力である模倣の力とその模倣の経験を蓄積・熟成させる場としての身体教育=「型の教育」が、人間関係形成能力等の根源的な基盤となりうる今日的な可能性について、歴史的な背景から仔細な検討を進める緒を探る。

## 3. 研究の方法

以下の観点から史資料を蒐集・整理する。

(1)「型の教育」の思想の習俗的基盤を、家・年齢階梯集団・職業集団・村落共同体などにおける身体の訓練のありさまを通して探るための史資料を、主に江戸時代の随筆・風俗見聞録・文芸作品などから蒐集・整理する。

(2)江戸時代の学問論・芸道論・道徳論・教育論などから、「型の教育」の主張を抽出しその論理構造・思考基盤を明らかにするための史資料を蒐集・整理する。特に江戸時代に数多く刊行された育児書と農書との比較に

よる子ども観、教育観の類型化を念頭におく。  
 (3)江戸時代における人為・人知と自然との関係に関する考え方を探るための史資料を蒐集・整理する。特に、江戸時代の土木工事、農法改良、改良された農法の普及のための農書など、そこから江戸時代の「自然」観を探るための史資料に重点を置く。

#### 4. 研究成果

(1)本研究が取り上げる対象は前述の通り「型の教育」である。この「型の教育」とは、一定の身体的動作の模倣とその繰り返しによる技や知の体得と精神的鍛錬である。したがって、本研究の目的を改めて言い直せば、身体という人間の内なる「自然」に対する働きかけに重点を置く「型の教育」と、「知識」（遍く伝達可能なように人為的に客観化・記号化された認識内容）の習得とその操作や活用に重点を置く教育との比較対照を行いつつ、後者の方向にますます傾斜しつつある現代社会の教育において、前者がどのような可能性・有効性を持ちうるのかを歴史的に検討するのに必要な史資料を蒐集・整理することであった。

この身体という「内なる自然」に対する働きかけの特質は、しかし、単にそれのみに目を向けるのではなく、「外なる自然」、すなわち我々を取り巻く環境としての自然に対する働きかけのありようと統一的に把握するのではなければ、的確な理解には到り得ないことが浮かび上がってきた。というのは、それらはいずれも、予測困難、統御困難なものとして、人知と対立するからである。

(2)このような観点から見る時、江戸時代は自然と人為をめぐって豊饒な思想を育んだ時代であったことに改めて気づかされる。その前期百年、つまり概ね1600年代には、浅海の埋め立てなどによる新田開発や利根川の流路付け替えに代表されるような巨大な土木工事が数多く行われた(表1 江戸時代以前の土木工事件数)。それは、人為による

表1 江戸時代以前の土木工事件数

	河川工事	溜池	用水路	新田開発
1550年以前	25(20.5%)	46(12.9)	24(5.5)	
1551~1660	16(13.1)	3(0.8)	11(2.5)	14(1.4)
1601~1650	31(25.4)	66(18.5)	55(12.7)	122(12.2)
1651~1700	13(10.7)	93(26.1)	121(27.9)	220(22.1)
1701~1750	11(9.0)	27(7.6)	52(12.0)	103(10.3)
1751~1800	12(9.8)	23(6.4)	31(7.2)	88(8.8)
1801~1868	14(11.5)	99(27.7)	139(32.2)	450(45.2)
計	122(100.0)	357(100.0)	433(100.0)	997(100.0)

速水融他『経済社会の成立 17-18世紀』(岩波書店、1988)より

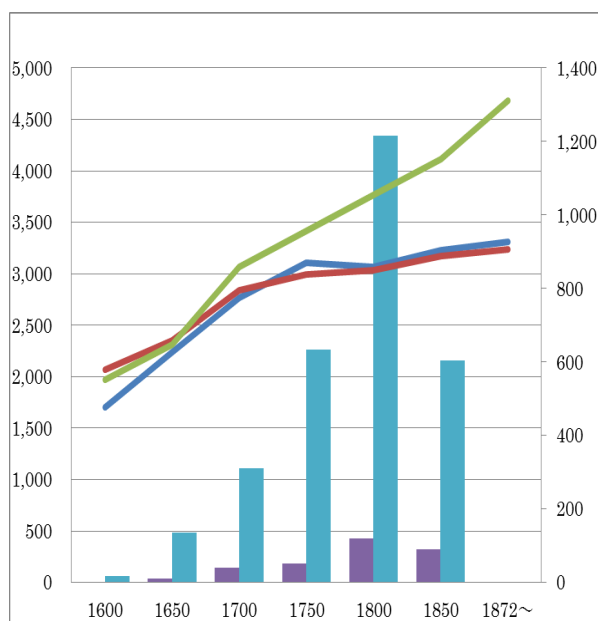


図1 江戸時代における人口、耕地面積、実収石高の変化と農書出版数、寺子屋開設数

農書成立数は、農山漁村文化協会刊行の『日本農書全集』に収録された農書数(『日本農書全集 別巻』2001)より、寺子屋開業数は、千葉県域内のもの(川崎喜久夫『筆子塚研究』(多賀出版、1992)より、のデータは、杉山伸也『日本経済史 近世・現代』(岩波書店、2012)より。なお、は1872年以降データなし。



自然(環境としての自然)の統制・管理と呼ぶことができる。

他方、あからさまな暴力による秩序の維持(武断政治)は次第に後景に退いて文治政治へと移行し、そのなかで武家の儀式礼法や庶民の行儀作法などに見るように身体を羈束する様々な規範が整えられもした<sup>1</sup>。それは、

<sup>1</sup> 成沢光『現代日本の社会秩序』、岩波書店、1997

人為・人知による内なる自然としての身体  
の統制とすることができよう。

(3)しかし、十八世紀に入ると、宝永地震・津波(1707年)のような激しい自然災害の度重なる襲来によって、自然を徹底的に開発し管理するという方向は見直しを迫られ、むしろ自然と折り合う姿勢が強まっていく。そのことは、前頁の表1および図1に見るように1700年代以降、大土木工事数が急減し耕地面積の増加率も低下していることに端的に表れている。

とは言え、同時に、単位面積当たりの収量増加により実収石高(食糧生産)が増大していることも見逃してはならない。それは、農耕の効率化を図るため新たな農法の開発が進み、出版事業の発展にも支えられながら、農書による新農法の普及が図られたことが大きな原因であると考えられる。併せて、その農書を読むための読み書き能力の育成・教育(寺子屋教育)の普及も長足の進歩を遂げる<sup>2</sup>。図1から明らかのように、1700年以降の耕地面積増加の低迷にもかかわらず実収石高の増加していく時期は、同時に、農書の刊行数や寺子屋の開設数が飛躍的に伸びていく時期でもあった。

(4)その時代の知は、その内容においては、人間が自然をねじ伏せるためのハードな知ではなく、自らの身体という内なる自然を通して外なる自然と折り合いながら自然の成長力を助長するソフトな知であった。同時に、その習得の方法においては、唱えやすいリズムを持った文章を繰り返し読んで暗記・諳誦したり、師匠の動作を見よう見まねでなぞったりして文字通り身につけるといった形がとられたため、その知は身体と乖離することはなかった<sup>3</sup>。

江戸時代の初期(概ね1600年代)におい

<sup>2</sup> 磯田道史『天下泰平の礎』、NHK出版、2012

<sup>3</sup> 辻本雅史『思想と教育のメディア史』、ペリかん社、2011

ては、外なる自然に対しても、内なる自然に対しても人為・人知による統制・管理が強力に推し進められ、知識社会へ向けての大きな進展が始動したものの、中期・後期(概ね1700年以降)においては、人為は常に自然との折り合いへとさし戻され、自然と人為とはその平衡を大きく崩すことはなかったことが明らかになってきた。

もちろん、1700年代の人口停滞のひとつの原因は、間引きであったとも言われる<sup>4</sup>。江戸時代が、そのように身体に対して過酷な一面をもっていたことも忘れる訳にはいかない。(5)我々は、未曾有の知識社会の到来を迎え、それへの対応を迫られている。翻ってみれば、以上に述べてきたように、江戸という時代もまた、泰平の世の中で都市という人口空間が拡大しそのなかに消費文化が充溢して、知識社会化の方向は押し留めるべくもなかったのであるが、しかし、人為・人知が自然との折り合いから大きく逸脱することはなかった。そのことをあらためてふり返りその足跡を丹念に辿ることは、自然の力の不可測性を痛感させられた今日、決してないがしろにされるべきではない。そのために読み解かれるべき史料を、本研究では数多く蒐集・整理した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

阿部 茂 (ABE, Shigeru)

山梨大学・教育学研究科・准教授

研究者番号: 20184210

<sup>4</sup> 鬼頭宏『環境先進国・江戸』、吉川弘文館、2012